

『方便から真実へ どちらが異安心か』より抜粋

「君は仏凡一体、機法一体は当益であるのに恰も現益で滅度密益の様な事を言い、正定聚の菩薩など言うのは間違いである」と注意されたが 仏凡一体、機法一体は現益ではありませんか、仏身と凡身とが一体と言えど当益を滅度密益のように語ると言う謗りも当たるかも知れないが、仏心と凡心とが一体に成ると言うのが、何故悪いのだ、それなら君達の現益はどんなものだ、どうもなれない、はっきりしない、晴れたか晴れぬか判らない、ぼんやりしたのが現益か。自分の機を抜きにして、只素直に法の他力を眺めて有難がっているのが現益か。水際も立たなければ角目もない、何時とはなしに称名が出るように成ったのが現益か。何の煩悶もなければ、疑いもなく、広大な慶びもなく、ほけの如くしているのが現益か。浄土真宗の自覚もなく、素直にお念仏しておれば皆十八願の機類じゃと澄ましている

るのが現益か。現益はそんな情けないものではあるまい。真宗の道俗が真の慶びのないのは信仰が徹底していかないからだ、殆どの寺院が生活に困り、寺内に不幸や悲劇が連続しているのは、功德大宝海を諦得していない証拠だ、合点だけしていて真の求道がないからだ、經典の紙面を読んで紙背に溢るる親心と一体に成っていないから、唯信独達の妙味が判らないのだ。仏智が満入していないからだ。

正定聚の菩薩と言うのが悪いと言っているが 役僧から勧学まで君達は何にも判らないのだね、僕が布教の時、聞即信の一念で流転の絆は截たれ、摂取不捨の利益を蒙って、現生で正定聚の菩薩の益を蒙り、必ず滅度の妙果を得ると話した処が、隣寺の役僧が菩薩がご飯を食べるか、便所に行くか、我々は死ぬるが死ぬる迄は泥凡夫ではないか、それに菩薩と言った、あれは間違い者だと悪口を言ったが、君達も正定聚の菩薩などと自惚れた事を言うのは間違いであると注意されたが、君達も可哀想に役僧と同様に菩薩の意味が判らないのか

い。仏教大学から出た大字典を今から読んで勉強したらどうだい、勉強したってお聖教の糟を嘗めているのでは千年経ってもこの意味は判るまい、心中閉塞で泣いていた求道者が信樂開発させさえすれば鮮やかに正定聚の菩薩の自覚はつくのだ。菩薩とは菩提薩埵と言う事で現在が生死の苦海である事に驚き、再び迷わぬ身に成りたいと求道する者は有漏の凡夫であつても皆菩薩と呼ばれるのだ。大事典には「大乘にては釈迦一仏にかぎらず在家出家に亘りて仏道修行の者は皆之を菩薩という」と書いてあるから読んで見給え、龍樹も無著も天親も皆吾等と等しく一個の求道者であり、御飯も食べれば便所にも行く、腹も立てれば悪口も言っていた悪性の人間なのだ、それが人世の迷夢から醒めて菩提の覺道に至る先覚者で有つたから吾々が陸續と涅槃の都に趣入する事が出来るのだ、この世の名利に狂わされている間は機相から言えば迷界の泥凡夫であるけれども、法の徳から言えば弥勒菩薩よりも一足先には大覺位を究める正定聚の菩薩ではないか。正定聚の菩薩の仲間入りの原因を諦得出来ない者

がどうして仏ぶつと言う結果けっかが得らるるのだ。凡夫ぼんぶの儘ままで行いかるる所ところは三惡道あくどうばかりだ。

君達きみたちは三三ほうもんの法門けんきゅうを研究けんきゅうしているのかい、第十九願だいじゅうくわんの機きが邪定聚じゃじょうじゆの菩薩ぼさつ、第二十願だいにじゅうくわんの機きが

不定聚ふじょうじゆの菩薩ぼさつ、第十八願だいじゅうはちくわんの機きが正定聚じょうじょうじゆの菩薩ぼさつと、言いっているではないか、君達きみたちは眺ながめた学問がくもん

であつて真しんの求道者きゅうどうしやでないから菩提薩埵ぼだいさつたではないのだ、菩提薩埵ぼだいさつたでないから何時いつまで迄も凡夫ぼんぶの

学者がくしやだ、聖人しょうにんは二卷鈔かんしょうに「信受本願前念命終、正定聚じょうじょうじゆの数かずに入る、即得往生後念即生、

之これは是これ必定ひつじょうの菩薩ぼさつなり」と書かいて有あるのを讀よんだ事ことはないのか、讀よんだつて実地じつちの体験たいけんがな

ければ味あじは判わからないのだ、論語ろんご讀よみの論語ろんご知らず、聖教しょうぎょう讀よみの聖教しょうぎょう知らずとは君達きみたちの事ことを

言いっているのだ。

これから仏凡ぶつぼん一体いつたい、機法きほう一体いつたいの本筋ほんすじに入いろう、勸学かんがくから再教育さいきょういくしなければ末寺まつじの坊主ぼうずも

小僧こぞうも浮うかばれない、真宗しんしゅうは自滅じめつだ。大經だいきやうは法ほうの真実しんじつを説とき、觀經かんきやうは機きの真実しんじつを顯あらわし、小

經きやうは機法合説きほうがっせつの經きやうだと型かただけは知しっているが、自分じぶんの機きの真実しんじつが知しれていないのだ、今いまが

生死しやうじの苦海くかいで溺おほれている亡者もうじゃであり、一息いきが猛火もうかに包つつまれている罪人ざいにんであり、親子兄弟嫁おやこきやうだいよめ姑しゅうとめのろあが呪のろい合あいつつ毒どくを吐はきつつある逆謗ぎやくほうの屍しかばねが自分じぶんである事ことを知らないから誓願せいがん不思議ふしぎの切きれ味あじを諦得たいとくする事ことが出来できないのだ。

成就じやうじゆの文もんに何なんと教おしえてあるか、諸有衆生しやうしゆじやう、その腹底はらぞこは唯除ゆいじよ五逆ぎやくひ誹謗ほうしやう正法しょうぼう、唯除ゆいじよとは素直すなおな柄がらと自惚うぬぼれている者ものに鉄槌てつちを加くわえた文字もじであつて、光明無量こうみやうむりやうに照てらされて見みよ、諸有衆生しゆじやうが一人残のこらず逆謗ぎやくほうの屍しかばねであると知しれと実機じつきが照てらし出だしてあるのだ。その機きに至心ししんに廻向えこうせしめたまえり、何なんを、上かみに向むかえば法体ほつたいの太行だいぎやう、下しもに向むかえば当果決定とうかけつじやう、逆謗ぎやくほうの屍しかばねが他力廻向たうりきえこうの名号みやうごうを聞信もんしんした一刹那せつな、即得往生そくとくおうじやう住不退転ふたいてんの益やくを得るのだ。即得往生そくとくおうじやうとは聞即信もんそくしんの一念ねんに当果決定とうかけつじやうした心命終しんみやうじゆう、捨自歸他しゃじきた、二種深心しゆじんしんの徹底てつていした唯信独達ゆいしんどくたつの極意ごくいだ。これを祖師聖人そししやうにんは不体失往生ふたいしつおうじやうと言いい、これを現生不退げんしやうふたい、正定聚しょうじやうじゆの菩薩ぼさつと言いうのだ、異議いぎが有あるか。

これを龍樹大士は「阿弥陀仏本願如是若人念我称名自歸即入必定」と、又「人能念是仏

無量功徳即時入必定是故我常念」と言われ、聖人は行巻に「眞実の行信を獲れば心に

歡喜多きが故に歡喜地と名く」と、又「憶念弥陀仏本願、自然即時入必定」、信巻には

「至心信樂之願、正定聚之機」と教えられ、無始より流転を続けている逆謗の屍が

万徳円備の嘉号によつて聞信の一念に仏智満入し、仏心と凡心と一つに成る處を仏凡一体と

言い、撰取不捨された處を機法一体と言うのだ、これが現益でなくて何が現益だ、君達はど

うかしてはいないか、君達は名号を死後に眺めているだけだから一念もなければ平生業成も

ない、ぼんやりした無歸命安心、自心建立の心でまるで幼稚園位の信仰だ。

終南の機法一体、願行具足の意味は机上の空論では判らないのだ、下下品の機 苦逼失

念の機で、君達のような初めから助かっている素直な機ではないのだ、猛火に包まれている

觀經の機の眞実が出ているのだ、三定死の境地に立ってぎりぎり舞いしているのだ、南無

とは歸命きみよう、歸命きみようとは本願招喚ほんがんしょうかんの勅命ちよくめいに歸順きじゆんする、どんな勅命ちよくめいか、汝なんじ（十方衆生ぼうしゆじよう）一心しん

（至心信樂欲生我國ししんしんぎようよくしやうがこく）

正念しやうねん（乃至十念ないしねん）

直來護汝ただちにきたるをまもらん（若不生者不取正覺にやくふしやうじやふしゆしやうがく）

不畏墮水火之難すいかのなんにだせんことをおそれざれ

（慈悲じひ）

唯除五逆誹謗正法ゆいじよぎやくひぼうしやうぼう（智慧ちえ）

すべて水火の難に墮せん事を畏

れざれとの仰せであるが

君達きみたちは水火の難すいかなんたる罪惡觀ざいあくかんを觀念かんねんしているだけで

実感じつかんがないのだ

から攝取せつしゆされた体験たいけんはないのだ、

洞爺丸とうやまるや紫雲丸しうんまるの遭難そうなんの新聞しんぶんを讀よんでいるだけで

九死きゆうしに一

生しやうを得た慶えびはないのだ。

勅命ちよくめいに歸順きじゆんした南無なむの一念いちねんの機きが阿弥陀仏あみだぶつの法ほうに攝取せつしゆされたのが

機法きほう一体いったいであり、

信念冥合しんねんめいごうの機法きほう一体いったいである、

それは如来にょらいすでに発願ほつがんして衆生しゆじやうに廻向えこうして下さ

る、

願心がんしんに歸順きじゆんした時とき、

同時どうじに其人そのひとの行ぎやうとなる、

願行具足がんぎやうぐそくの南無阿弥陀仏なむあみだぶつと言いえるのだ、

已すでに願行がんぎやうを成じやうじ給たまえる側がわから言いえは十劫じうの昔むかしの正覺しやうかくで、

それは法体成就ほうたいじやうじゆの機法きほう一体いったいであ

り、それが衆生しゆじやうに徹底てつていした時ときが信念冥合しんねんめいごうの機法きほう一体いったいである、

然しかるに君達きみたちは法体成就ほうたいじやうじゆの機法きほう一体いったいである、

然しかるに君達きみたちは法体成就ほうたいじやうじゆの機法きほう一体いったいである、

一體いつたいのみを教おしえて、

出来上できあがつて

いる事ことを喜よろこべ、

助たすかつて

いる事ことを喜よろこべ、

機きに何なんの用事ようじが有あ

るかと、十劫秘事、無歸命安心を平気で教えて、信念冥合の機法一体たる機受の信相を忘れて
いるのではないか、だから仏凡一体、機法一体も現益と言う事を知らないのだ。

祖師で言えば「金剛の真心を獲得すれば横に五趣八難の道を越え必ず現生に十種の益を得
る」と仰せられてあるが、金剛の真心とは信樂開発の一念、君達はこれが判らないというの
だから浄土真宗の僧侶ではないのだ、これを知らざるを以て他門とする、それが真宗の法
城を護るのだから孤城落日、七百回忌を転期として滅亡するぞ。信樂開発すれば仏徳が
顕現して至徳具足の益は順境、転悪成善の益は逆境、順境でよし逆境でよし、心多歡喜の
益で大満足し、冥衆や諸仏に護念せられて、一切の有碍に障りなく、諸仏と肩を並べた入
正定聚の現益を得ると教えてあるのは仏凡一体、機法一体になったからではないか、これ
でも現益と言えないか、法徳から言っ正定聚の菩薩と言えないか。

蓮師で言えば御文章二の九に「一念歸命の信心をおこせばまことに宿善の開発にもよほさ

れて仏智ぶつちより他力たうりきの信心しんじんをあたへたまふが故ゆえに仏心ぶつしんと凡心ぼんしんとひとつになるところをさして信心獲得しんじんぎやくとくぎようじやの行者ぎやうじやといふなり」これも現益げんやくではないのか。二の十に「一念ねんも本願ほんがんを疑うたがう心こころなければ、かたじけなくもその心こころを如来にょらいのよくしろしめして、すでに行者ぎやうじやのわろき心こころと如来にょらいのよきおん心こころとおなじものになしたまふなり、このいはれをもて仏心ぶつしんと凡心ぼんしんと一体いつたいになるといへるはこのころなり」これも当益とうやくか。四の八に「このゆへに南無なむと歸命きみょうする機きと阿弥陀仏あみだぶつの助けたすまします法ほうとが一体いつたいになるところをさして機法きほう一体いつたいの南無阿弥陀仏なむあみだぶつとはまふすなり」、四の十一「されば弥陀みだをたのむ機きを阿弥陀仏あみだぶつのたすけたまう法ほうなるがゆえにこれを機法きほう一体いつたいの南無阿弥陀仏なむあみだぶつといへるころなり」と、四の十四に「南無なむの二字じは衆生しゆじやうの弥陀みだをたのむ機きのかたなり、また阿弥陀仏あみだぶつの四字じはたのむ衆生しゆじやうをたすけたまうかたの法ほうなるがゆえに、これすなはち機法きほう一体いつたいの南無阿弥陀仏なむあみだぶつと申もうすころなり」と仰おほせられてあるが、これは皆現益みなげんやくではないのか、何なんと情なさけない信仰しんこうではないか、君達きみたちはこれが判わからないのか。

安心決定鈔あんじんけつじょうしやうには「念仏三昧ねんぶつさんまいにおいて信心決定しんじんけつじょうせんひとみは身みも南無阿弥陀仏なむあみだぶつ、こころも

南無阿弥陀仏なむあみだぶつとおもふべきなり、乃至み 身を極微ごくみにくだきてみるとも報仏ほうぶつの功德くどくのそまぬと

ころはあるべからず、されば機法きほう一体いつたいの身みも南無阿弥陀仏なむあみだぶつなり、乃至ないし 心を刹那せつなにちはりて

見るとも弥陀みだの願行がんぎやうの遍へんせぬところなければ機法きほう一体いつたいにして心こころも南無阿弥陀仏なむあみだぶつなり、弥陀みだ

大悲だいひのむねのうちにかの常没じやうもつの衆生しゆじやうみちみちたるゆへに機法きほう一体いつたいにして南無阿弥陀仏なむあみだぶつな

り」又「念仏三昧ねんぶつさんまいといふは報仏ほうぶつ弥陀みだの大悲だいひの願行がんぎやうはもとより迷まよいの衆生しゆじやうの心想しんそうのうちにい

りたまへり、しらずして仏体ぶつたいより機法きほう一体いつたいの南無阿弥陀仏なむあみだぶつの正覺しやうがくに成じやうじたまふことなりと

信知しんちするなり、願行がんぎやうみな仏体ぶつたいより成じやうずることなるがゆへに、おがむ手て、となふる口くち、信しんずる

心こころみな他力たうりきといふなり」これは皆現益みなげんやくではないのか、法ほうを向むこうに眺ながめていて君達きみたちは

念仏三昧ねんぶつさんまいに成なつていないから現益げんやくを知らないのだ。偶像ぐうざうに執とらわれてこの人間にんげんが死しななくては

一つに成なれるかと固執こしゆうしているが聞即信もんそくしんの一念いちねんが徹底てつていしていないから平生業成へいぜいごうじやう、現生不退げんしやうふたい

と口で言いながら実地の味は知らないのだ。南無阿弥陀仏は人法不二だ、光明の智慧と寿

命の慈悲、衆生に届けば破満の徳が顕れるのだけれども、君達は具徳と言って西方十万億

土の彼方の仏の功徳を眺めているだけであるが、大沼のは衆生貪瞋煩惱中に飛込んで

仏智満入して、一切の無明は晴れ、一切の志願が満足さされて、地上の最大果報者と顕徳を

喜んでいいるのだから桁が異うのだ、君達から僕を見れば異安心に見えるだろうが、僕から

君達を見れば無安心で書物の中にいる紙魚としかみえないのだ。

何故この味が判らないのだ、君達がはつきり言えないのは、実地の体験がないからだ、聞

信の一念に真仮の分齊鮮やかに諦得出来たら信前の機を激発せずにはいられないのだ、鋭く

突くから曖昧な者は自分の程度を知らずに気に合わないから異安心と言うのだ、無量永劫の

苦抜けをさされ、十方法界我が物なりと言う大自覚を得さして頂いた者は、仏智満入して身

も心も南無阿弥陀仏だから本願や行者・行者や本願、私を離れて弥陀がない、弥陀を離れて

私わたくしがないと言いえるのだ、親子おやこ一体いつたいに成なった者ものが死しんでから助たすかると言いう身しん命み終ゆうじゆうを言いうものかい、今いま撰せん取しゆされたのだから即そく得とく往おう生じよう、心しん命み終ゆうじゆう、平へい生ぜい業ごう成せい、現げん生し不しょう退ふたいとはつきり言いうから、言いえない人ひとから見みれば滅めつ度ど密みつ益やくのようきに聞きこえるのだ、この身みが仏ほとけととぼけた事ことを誰だれが言いうかい、しかし体たい徳とくから言いえば宇うち宙ゆうの真しん理りを全ぜん領りようしたのだから決けつ定じよう往おう生じようの自じ覚かくははつきり有あるのだ、しかしその裏うらには三さん千せ世かい界なかの中なかの惡あく魔まは私わたし一人ひとりであると言いう懺さん悔げは常つねに動うごいてゐるのだ。一いち応おう弁べん明めいを終おわつたから質しつ問もんする。

第一問、仏ぶつ凡ぼん一いつ体たい、機き法ほう一いつ体たいは現げん益やくとは言いえないのか、現げん益やくではないとどの御お聖しやう教ぎやうに出でているか。

第二問、仏ぶつ智ち満まん入にゆうしても一たい体たいではないか。

第三問、彼ひ此し三ごう業ふ不そう相しやう捨り離りでも一たい体たいではないのか。

第四問、若し仏凡一体、機法一体を当益とすれば聞信の一念で何を頂くのだ。

第五問、十種の益の入正定聚の益を得て、死後仏凡一体になるのか。

第六問、安心決定鈔の念仏三昧において、信心決定せん人は等は死後の当益の事か。

第七問、御文章の南無と歸命する機と阿弥陀仏の助けまします法とが一体になるところをさして機法一体の南無阿弥陀仏とは申すなり、と仰せられてあるのも当益の事か。

第八問、火は木を離れず木は火を離れずが一体ではないか、燃え立つ焰の中で活躍するのが無碍の光明ではないか、一体にならなくて歓喜と懺悔が出るか。